

額田寺伽藍並条里図の復元模写製作

村岡 ゆかり

国立歴史民俗博物館所蔵の額田寺伽藍並条里図を復元模写するという試みは、一九九一年九月一三日より始まり、一九九三年一月六日に完成した。復元模写というものは、その作品の描かれたときの状態を推定して描くことで、時代を経て変褪色している絵の具や素材を研究し、欠損している色、線などを元の状態に戻すものである。対象となった原本は褪色が激しく、肉眼での観察だけでは復元に必要な情報を得ることは難しかった。また、欠損部分が多く、線を生み出すためには歴史的な検討も必要であった。したがって、完成までには様々な角度からの検討が行なわれたわけであるが、ここでは作画の担当者として、主に復元の工程を述べたい。

一、復元模写製作の手順と考察

(1) 原本観察

まず最初に肉眼での原本観察を行なった。原本の素地は麻布でできており、何箇所か縫われている。中央部分は布の継目であり、それ以外は川などの欠損の補修であると思われる。その上には、描かれている墨・朱色の線・茶色の線、わずかに残る国印が認められるだけで、他にはどんな色が塗られていたか、麻布のじみ止めには何が使用されていたのかなどは、欠損や剥落のために詳細を観察することができなかった。

(2) 原寸大写真を使い、上げ写しを行なう

和紙の伸び縮みなどを考慮した結果、ポリエステルレーシングフィルムに墨で上げ写しをすることにした。これは、原本の詳細な観察にもなり、後の復元下図の大本となるものである。写真は不鮮明であり特に文字と麻の繊維の区別がつかないところもあったが原本の観察で補うことにした。

(3) X線写真を元に朱色の線を(2)に描き込む

何度も観察するうちに、今まで見落としていた部分にも朱線が存在することが判り、複雑な線が交錯している絵柄であることがわかった。

(4) (3)を原寸大にコピーする

このコピーしたものを元に復元作業を行なう。これは原本の縫い縮められた部分などを切り開くためには、コピー用紙の方が作業しやすいのである。

(5) 小下図の作成

A3大に縮小した(4)のコピーを元に光学電子顕微鏡、X線透過検査、赤外線写真の分析結果(国立歴史民俗博物館、永嶋正春氏による)や、現地調査、肉眼で原本を観察して得た情報をまとめたものをおおよその判断材料とし、色・線を復元していった。

(6) 検討した小下図を元に顔料、絵図の表現の決定を行ない、(4)の原

寸大コピー紙に復元の線を描き込む

色に関しては、線透過検査で、伽藍や寺領の境界線などの朱線が鉛丹であり、道を表す茶色の線が弁柄か倍楮であることがわかった。光学電子顕微鏡の観察では、緑青の粒が樹木と丘の稜線の一部に確認されたが、池、川と画面の半分以上を占める薄い茶色のしみには顔料の痕跡は認められなかった。薄い茶色のしみは、黄土の痕跡ではないかとも思われたが、奈良時代には黄土が軽視されていたこと、正倉院文書にも黄土の記載がないことなどから黄土である可能性はなくなり、染みの部分が小高い丘の表現であることと、染みが緑青焼けの様に見えることから緑青か白緑であると判断した。池と川は、ほぼ同時代の絵図である東大寺山界四至図・東大寺開田図を参考にした結果、緑青か白緑のいずれかではないかと考えられたが、共に抜け落ちるほど痛んでいるので緑青とし、丘の方は白緑を使用して、色の対比を出すことにした。また、絵図上の様々な表現については、丘の稜線には墨の痕跡がわずかしか見ることができないが、同時代の絵図や絵画には必ずといっていい程樹木が描かれている。また、池・川の模様に関しても同様である。このため、参考となる文献や絵画を頼りとしながら線を生み出さなくてはならず、最終的には自分なりの判断で表現しなければならなかった。以上の結果、付箋で見えない部分や剥落、欠損した緑青・白緑・丹・弁柄の色を復元を行った。また、墨線に関しては、赤外線写真を参考に復元作業を行なった。

(7) 亀裂や修理によって歪んでいる状態の写真を上げ写ししたため、その歪んだ条里線を直線に戻すため、別のコピー紙を使い、切り張りし復元の原本とした。

(8) (7)の下図をさらにポリエステルレーシングフィルムに写す

(7)の紙は厚く、麻布に写しにくいいため再びポリエステルレーシング

フィルムに写すことにした。

(9) 和紙に復元

(7)のコピー紙の上に和紙を置き上げ写しを行ない、鉛丹の線・弁柄の線・文字以外の墨を描く。彩色したのち、文字を墨で描く。(彩色の順序の詳細は、次の麻布の復元で述べることとする。)仮張りに貼り左右の条里線を復元し、仕上げた。

(10) 麻布に復元

原本と同じように織られて復元された麻布は、約一四五cm×約七二cmの布二枚を中央部分で継いでいるもので、礬水をした後叩くという加工を施している⁽³⁾。尚、麻布に滲み止めをするにあたっては、①ふのり②礬水③豆汁等を塗布する案が出されたが、①②を塗布した麻布と生のまま麻布に彩色するという実験を行なった結果、②の礬水が描きやすかったという理由で礬水を使用することにしたものである。次に麻布の上に⑧を置き、転がしながら残像を利用し、下の麻布に写していった。写した順序は左記の通りである。

条里線(墨) ↓坪数(墨) ↓道(倍楮) ↓寺領等の線(鉛丹) ↓木(墨)
↓丘等の表現(白緑) ↓池・川・草・丘の上の樹影(緑青) ↓文字(墨)
↓池・川・草・丘の上の樹影の模様(墨)

二、材料

和紙/楮紙(楮一〇〇%、pH値七・三、紙舗 直製)

麻布

顔料/墨・白緑・緑青(一三番、一二番、一〇番、九番を混ぜて使用)

鉛丹(最近の丹は、早くて一〜二年で暗紫色に変色するため、

史料編纂所に戦前より保管してある絵の具を使用してみ

た。

黄口朱(和紙には丹の代わりに朱を使用。これは変色を起こさないということで使用したのだが、その後の調べでは朱も黄色味が強いほど変色しやすいということがわかった。)

岱赭(弁柄が使用されていたとも考えられるが、色のバランス等を考慮し、岱赭を用いた)

接着剤/三千本膠(約二〇〇ccの水に対して三千本膠一本の割合である。)

筆/雀頭筆・彩色筆・削用筆・狼狸面相

ポリエステルレーシングフィルム(二枚)

三、まとめ

麻布に絵を描く作業は、筆者自身経験したことがないうえ、参考となる文献もなかった。また、現代においては作業例がないため、礬水の配合や膠の濃度など、一つ一つが試行錯誤の繰り返しであった。絵図の表現や絵の具の判断についても、現地へ行き、その丘陵の雰囲気を見て、感じてきたものをだそうとしたため、独自の表現に近いものになってしまったようだ。池や川の形など、まだまだ修正の必要があるところは数多いのではないだろうか。とりあえず完成には至ったが、課題は多く残されたように思う。

〔註〕

- (1) 国華第五二編第七冊 奈良朝における顔料の種類 野間清六
- (2) 正倉院の絵画 田中一松 絵画史論集 上巻/水墨美術大系第一巻「白描画から水墨画への展開」/絵因果経
- (3) この作業は、高田装束研究所(代表、高田俊男先生)にお願いしたもの

である。